

Japa Newsletter (毎月 1 日発行)



INDEX

1. コ ラ ム：社会の変化・流れをどう読むか
2. 寄 稿：日本の植民地化を防いだ遣欧少年使節 (出島の杜 片山仁志)
3. 解 説：IT サービスの「終わりの始まり」
4. 関連情報：「旬報 時代のシグナル」として切り出し
5. 連携団体及び Japa からのご案内
6. 読者の声：
 - ・ 俳句随想 五七調の起源 ～リズム論事始～ その3
(内閣府 地域活性化伝道師・(俳句)ARCセッション主宰 藤村望洋)
 - ・ 第二の人生 生涯現役で行く その13 (作詞・作曲家 高橋育郎)
7. つばやき (編集後記に代えて)

注：担当執筆者名の記載のない項目は、編集発行人(芝原 靖典)による。

※ 本 Newsletter は Japa 日本専門家活動協会が毎月 1 日発行の会員及び関係者向けの Newsletter です。
1 ヶ月後に当協会の HP <https://japa-fellowlink.wixsite.com/japa/newsletter> に公開しています。

◆◆ 「旬報 時代のシグナル」ご購入の案内 ◆◆

主体・技術・仕組みの3要素が同時に揺らぐ今、何が時代の本質的な変化なのか。表層事象ではなく構造的なシグナル情報を厳選し、社会システムデザイナーによるキュレーション旬報【毎月3回発行】の購読申込をお待ちしています。

1. コラム：時代を読む地図のつくり方

(Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典)

社会の変化を読む作業は、もはや個別ニュースを追うだけでは足りない。気候変動、人口減少、AI の進展、地政学的緊張、地域の衰退、孤独の拡大等、これらはばらばらの問題ではなく、同じ社会システムの別々の断面として現れている。長年「社会システム」を生業としてきた者からすると、社会を動かす要素は「主体・価値観（個人・集団・組織）」「技術（要素技術・技術システム）」「仕組み（法制度・ルール・慣習等）」の3つと云える。この3つが噛み合うとき社会は安定するが、時代が変わると実態と仕組みのズレが生まれる。AI が普及したのに、働き方や意識が変わったのに変わらない。現在の混乱の多くはこのズレから説明できる。

では、なぜ時代遅れの仕組みは残り続けるのか。これは怠慢ではない。仕組みには「昔うまくいった成功体験」が深く埋め込まれており、加えて仕組みをつくる立場にある人の多くは既存制度の受益者でもある。社会には慣性がある。巨大な船が急には方向転換できないのと同じである。しかし社会は外部から大きな衝撃が来たとき変わる。コロナ禍はその典型で、リモートワーク・オンライン授業・オンライン診療・行政 DX 推進と、変えられなかった仕組みが一気に再設計を迫られた。外圧は古い仕組みと新しい現実のズレを強制的に可視化するのである。

社会の変化は「良い技術が出たから変わる」という単純な話ではない。技術的に可能なのに導入されないものがあり、社会的には望ましくなくても仕組み化されるものもある。その差を生み出すのが利害・権力・資源配分の力学である。誰が利益を得て誰がコストを負担し、誰に決定権があるのか。この問いなしに社会変化の方向は読めない。制度変化論のノースは、過去の選択が未来を縛る「パス依存性」を重視した。既得権（利益と負担の配分）や評価基準が変わらなければ変更は形だけで終わる。仕組み（制度等）の背後には歴史と配分の構造がある。

社会にかかる外圧は一括りにできない。長期ストレスとは少子高齢化・気候変動のようにじわじわ効く圧力で、気づいたときには社会の前提そのものが変わっている。急性ショックとは災害・感染症パンデミック・金融危機のように突然やってくる衝撃で、平時には見えにくかった脆弱性を一気に表面化させる。対応戦略が異なるため、この区別は重要である。長期ストレスにはじわじわ適応し、急性ショックには素早く立て直す力が求められる。新しい時代の兆しはこうした衝撃の後に生まれる「端っこ・縁(ふち)」の実験から始まることが多い。その先にあるのがレジリエンス→持続的イノベーション→社会システムリデザインという方向性である。

社会の現状を理解するとは、個別のニュースを追うだけでなく、個別の制度や技術を知ることでもない。それらの関係がどうズレ、どう再編されつつあるかを見ることにほかならない。その見取り図として、軸 1 [時代環境（外部性）]、軸 2 [時代構造（社会システムの内部構造）]、軸 3 [日本・地方創生（社会・地域課題）]、軸 4 [主体の最小単位である個人の孤独・孤立・Well-being]、軸 5 [社会システム設計・思惟論] という 5 つの軸が役立つ。この 5 軸で整理すると、バラバラに見えたニュースがひとつながりの時代の流れとして見えてくる。

状況や構造変化に応じて、「問いを立て直す柔軟なフレーム」が重要である。この 5 軸の地図を手に入れたとき「自分はどこにいるか」「今から何を始められるか」という問いが生まれる。

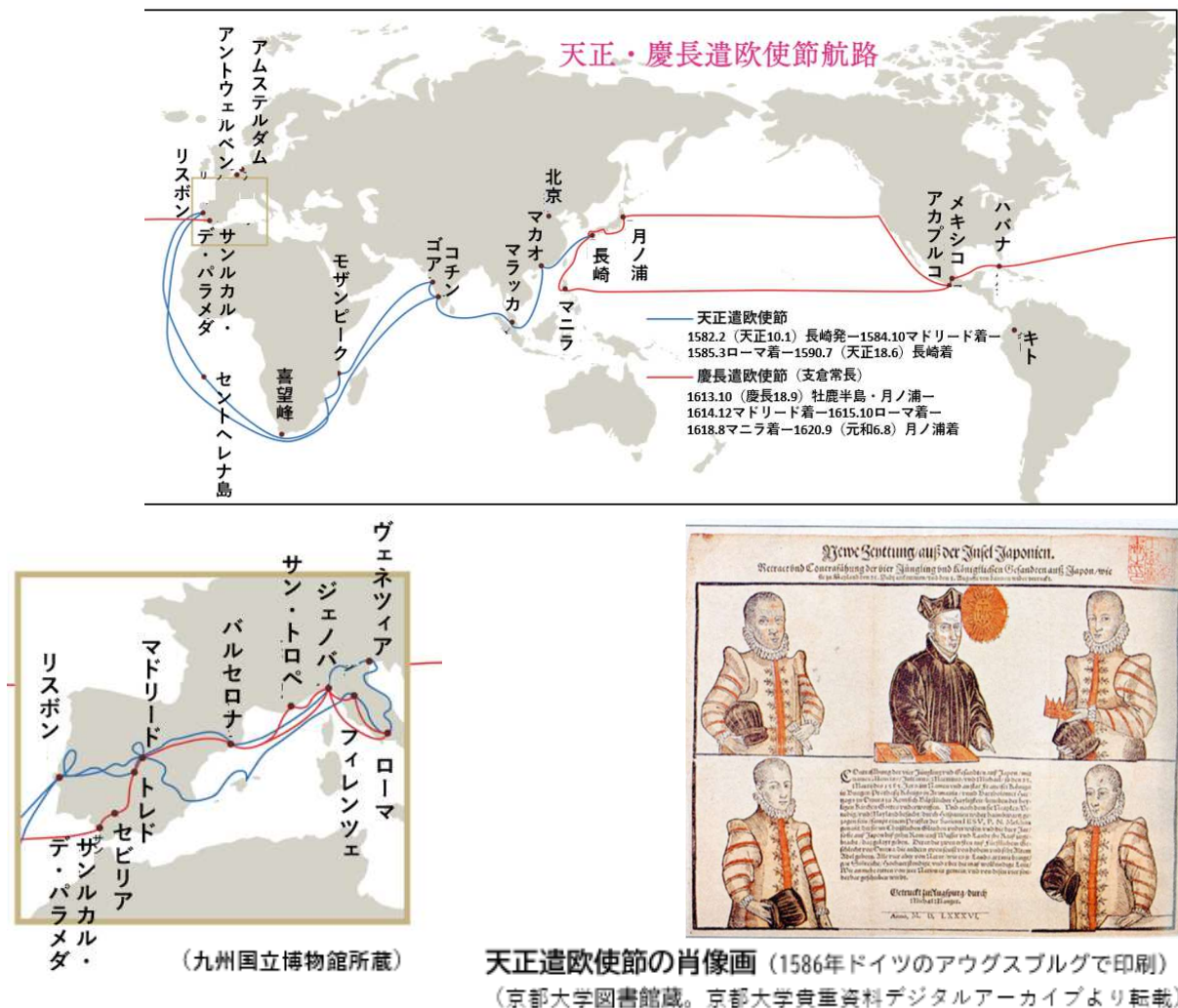
補：本コラムの詳細は <https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>、バックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/column> に掲載

2. 寄稿：日本の植民地化を防いだ遣欧少年使節（出島の杜代表 片山 仁志）

(1) NHK 大河ドラマ「豊臣兄弟」が活躍した安土桃山時代。足利幕府の戦国の世であり、約100年の長い間、幕府の権威が揺らぎ大名の駆け引き、領土争いが続いた。民は困窮の暮らしを余儀なくされていた。

武将の戦いがクローズアップされる時だが、当時、キリスト教の布教という歴史的な文化革命が発生、日本が植民地化の危機に直面し、その危機を、日本の高い文化水準が防いだことは知られていない。日本人は万葉依頼、高い資質をもち、戦国時代にも文化は磨かれていた。

独断の仮説ではあるが、そのことを実証したのが4人の遣欧少年使節であり、その外交の功労と時代背景を探ってみる。



(2) 時は1500年代。ヨーロッパは、宗教改革によるプロテスタントの台頭と蒸気汽船による大航海時代が出現した動乱期。ポルトガル、スペインの領土の小国でも世界の覇者となれた。結果として、アフリカ、アメリカ、アジアの植民地化が進んだ。植民地化思想は、表向き「野蛮な国は統治ができない。代わりに我々が国を治めてやる」との傲慢な思想だが、実質的には、布教の名の下、貿易を通じた経済的搾取、究極的には「領土の割譲・拡大」を狙ったものであることは否定できない。

(3) アジアは、インドが英国に、中国が列強国に割譲されたが、次に狙われたのは、14 世紀、マルコポーロが東方見聞録で紹介した「東洋の世界最大の産銀国・ジパング」であった。

当時の日本の支配者は織田信長である。信長は、政治家としては、ジュリアス・シーザー、ナポレオンに匹敵する天才的な革命政治家ともいえる。合理主義を貫き、兵・農と政・教を分離、中世的権威を解体して近世を開扉した。

忘れてならないのは、信長が、文化政策にも開明的であったことである。宗教については「庶民が安心立命を願う宗教心は否定しない、政治に関与しない限り自由」との開闢的思想をもち、異教であってもキリスト教には寛大であった。そのため、西欧の文化（何よりも鉄砲、戦術、美術等）が移入され、日本の近代化が進んだ。一方、政治集団化していた比叡山、石山本願寺の宗教徒は壊滅された。500 年も続いた中国の戦国時代のようにならずに済んだことも特筆される。

(4) 初めての宣教師として、1549 年にフランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸して以来、多くの宣教師が来日した。布教は、九州の大名も洗礼するまで広まった。ザビエルは、日本人について「この国の人は最高の国民、これほどの異教徒は今後みつけれない」と高く評価し、その後、1579 年に長崎県南島原市に來日したバリニャーノは、法王庁に「日本は文化度が高く、この国は植民地化に適さない」と報告している^(注)。その証として、彼は、セミナリオ（神学校）の中で、選りすぐりに優秀な少年 4 人（13～15 歳）を選抜、信長の許可を得て、ローマに派遣した。

(注) 宣教師達が、布教の傍ら日本の状況について克明に法王庁に報告していたことが、歴史研究家若桑みどり氏の「クアトロ・ラガッティ（4 人の少年）」に詳述されている。ルイス・フロイスは「日本と西洋の文化比較」の著述で、西欧を凌ぐ日本の文化度を具体的に観察し記録に残した。両著とも、当時の日本文化を知る上で貴重な書物である。是非お読みいただきたい。

(5) 4 人は、1582 年長崎を出帆し、8 年半の歳月をかけ喜望峰経由で往復した。ポルトガル、スペイン、ローマの各都市で、破格の大歓迎を受け、2 人の法王に謁見する栄誉に輝いた。新約聖書の東方三賢人の記述「日出ずる東洋からの使者」を連想させたこともあるが、何よりも、少年達の気品、素養、礼儀作法等が素晴らしかったことによる。セミナリオで学んだオルガン演奏に現地人が驚嘆したと記されている。

宣教師達の報告が立証されたことにより、西洋の日本に対する植民地化構想は放棄された。秀吉、家康の時代に禁教政策がとられたことが独立を守ったとされるが、その前に、うねりは大きく変わっていたことを忘れてはならない。

4 人は外交官でもあった。相手の懐に飛び込み、相手を理解する、まさにグローバリゼーションを地で示した。帰国後、禁教政策の下、4 人は悲惨な人生を歩むことになったが、日本人の高い資質を西欧に認めさせた功労は計り知れない。

(6) 4 人が出立した年のわずか 4 ヶ月後、後立てとなった信長は本能寺の変で倒れた。少年使節の史実は、禁教政策の煽りを受け、明治 6 年に岩倉具視海外使節団がドイツで肖像画を発見するまで、約 300 年もの間、歴史上から封印されていた。

補：本コラムの詳細は <https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>、バックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/column/> に掲載

3. 解説：IT サービスの「終わりの始まり」

～ Evernote から学ぶデジタル情報管理の自衛策 ～ （日本専門家活動協会 芝原靖典）

2025 年 12 月、長年愛用してきたノートアプリ「Evernote」から、突然の大幅値上げ通知が届いた。年額でおよそ 2 倍、円安も加味すると実質 41,000 円超という衝撃的な金額である。この体験は、外資系 IT サービスに依存することのリスクを正面から考え直す契機となった。本稿では、約 3 万件のノートを Evernote から移管した「移行奮戦記」を通じて、デジタル情報管理における自衛策を解説する。

(1) 突然の「2 倍値上げ」通知——外資系 IT サービスのリスク

2025 年 12 月初旬、Evernote から届いたメールには、2026 年 1 月 23 日付で Personal アカウントが自動的に「Advanced プラン」へ移行し、年額 249.99 ドルが請求されるとあった。前年の更新額は 129.99 ドルだったため、ドルベースで約 1.9 倍、円安（1 ドル 165 円換算）も重なり、円ベースでは約 2 倍の 41,000 円超となる。

	スターター	アドバンスド
コンテンツ	最大 1,000 のノート、20 のノートブック、1,000 の添付ファイル	無制限*のノート、ノートブック、添付ファイル
スペース	最大 10 のワークスペース	最大 12,000 のワークスペース
タグ	最大 100 のタグ	最大 100,000 のタグ
ストレージ	最大 1 GB	無制限*
同期されたデバイス	最大 3 つのデバイス	無制限*
接続されたカレンダー	最大 5 つのカレンダー	最大 5 つのカレンダー

出典：mail に記載されていた比較表

注：Advanced プランへの自動移行に注意。ヘビーユーザーは Starter では事実上不足。

更新日までにデータ移行が間に合わなかったため、やむなく更新。その後、じつくりと移行作業に取り組むことになった。

(2) Evernote25 年の歴史と「迷走」 —なぜ値上げは繰り返されるのか

直近（2025 年 7 月～）のプラン再編・再値上げは以下の状況である。

旧プラン名	新プラン名	改定前（年額）	改定後（年額）	倍率
Free	Free（継続）	無料	無料	—
Personal	Starter ノート 1,000 個まで	9,300 円	約 7,000～10,000 円	—
Personal	Advanced 自動移行先	9,300 円	17,899 円	約 1.9 倍
Professional	Advanced	12,400 円	17,899 円	約 1.4 倍
Teams	Enterprise	公開価格あり	要問い合わせ	非公開化

※ Personal から新 Starter へ移行すると一見値下がりに見えるが、ノート数 1,000 個の上限があり、ヘビーユーザーは事実上 Advanced への移行（値上げ）を強いられる仕組み。

Evernote は 2000 年代初頭の創業以来、「第二の脳」として世界中のユーザーに愛されてきた。日本では米国に次ぐ第 2 位の市場となり、2010 年には日本語版サービスが開始された。しか

し 2015 年以降、IPO（株式上場）の失敗、コア事業以外への多角化路線の行き詰まり、相次ぐ CEO 交代と大規模レイオフが続いた。

2022 年にはイタリアのスタートアップ「Bending Spoons」が買収。以来、2023 年・2024 年・2025 年と立て続けに料金改定が行われ、実質的な無料利用が不可能な水準にまで引き上げられた。2024 年には日本法人も解散し、ユーザーの不安と離脱が加速している。

今回の経験は、外資系 IT サービスを利用することの本質的なリスクを浮き彫りにした。サービスの価格設定はユーザーの意思とは無関係に変更され、長年蓄積したデータは「人質」に近い状態となりうる。現在の AI 市場は桁違いのスピードと資金の流れが生じており、今後も同様の事態は各サービスで起こりえる。

(3) Notion への移行——苦闘の 2 週間

まず移行先として選んだのは「Notion」。AI に相談すると移行先として強く推薦されたためである。しかし、Evernote に蓄積された約 70 のノートブック・約 3 万件のノートの移行は、想像以上の困難を伴うものだった。

① 初期の誤作業と正しい手順の発見

最初の 1 週間、AI（Gemini）の誤った案内に従い、ENEX ファイルへの変換やノートブックの分割準備作業を行ったが、これは後に無駄な作業と判明（Claude）。ENEX ファイルのインポート機能は現在の Notion にはなく、Evernote のノートブックを Notion に直接インポートする機能が存在し、1 つのノートブックあたり 5,000 件程度まで対応可能であることがわかった。

② 実際の移行で発生した問題

本格移行では、複数のノートブックを一気にインポートしようとする途中で失敗することが多発した。原因の一つは PC のスリープ（自動休止）による処理中断。また、Notion の無料プランでは 1 ファイルあたり 5MB の上限があり、これを超えるファイルは取り込めない。失敗した DB を削除してやり直す作業を繰り返し、全移管完了まで約 2 週間を要した。

Evernoteの構造		Notionの対応	
ノートブック	→	データベース（1つのページ内）	
└ ノート1	→	└ データベースの行（1項目）	
└ ノート2	→	└ データベースの行（1項目）	
└ ノート3	→	└ データベースの行（1項目）	

実際にインポートすると、
 ノートブック＝ページ、その中のノート＝データベースの各行として自動的に取り込まれます。

(4) Joplin への移行——驚異の 10 時間完了

Notion への移行後、無駄になった ENEX ファイルを活用して「Joplin（ジョプリン）」にもデータを移してみた。Joplin は 2017 年にリリースされたオープンソースのノートアプリで、

「Evernote の思想を継承しつつ、プライバシー重視に純化させたテキスト管理システム」とも評される。

移行手順は非常にシンプルである。Evernote でノートブックを ENEX 形式でエクスポートし、Joplin アプリでその ENEX ファイルをインポートするだけ。ENEX ファイルはすでに用意できていたので、順次、流し込む。エラーは一件も発生せず、全ファイルの移行が約 10 時間で完了した。Notion の 2 週間と比べると、その差は歴然である。

(5) Joplin と Notion を使い分ける——2 つの設計思想

移行を終えて気づいたのは、Joplin と Notion は「競合する代替品」ではなく、設計思想がまったく異なるツールだということである。

Joplin はユーザー自身がデータを管理する「ローカルファースト」の思想を持つ。データは自分の PC に保存され、同期先も Nextcloud・Dropbox・OneDrive など自由に選べる。E2EE（エンドツーエンド暗号化）を有効にすればクラウドプロバイダーですら内容を閲覧できず、機密性の高いリサーチや知的生産物の保管に最適である。無料。

一方で Notion は、チームでの情報共有・タスク管理・データベース活用を得意とする「クラウドネイティブ」なプラットフォームである。組織的な利用や、AI ツール（NotebookLM や Claude 等）との連携を視野に入れるなら、Notion の設計思想はより適している。基本、無料。

更新停止予定の Evernote の完全アーカイブは Joplin に、既存データを含め、新規データは Notion で運用する情報基盤整備が整った。これからは Notion らしいデータベース活用、AI ツールとの連携にも取り組んでいける。

(6) 移行奮戦記から得た教訓

約 3 週間の「移行奮戦記」を振り返ると、以下の教訓が浮かび上がる。

- ① IT サービスへの依存リスク（サービスの価格設定はユーザーの意思と関係なく変更されること）を認識することである。重要なデータは、複数のプラットフォームに分散して管理するリスク分散が不可欠である。
- ② AI への過信は禁物ということである。移行手順について AI に相談したが、誤った情報を提供された。事前に、複数の AI に確認を取り、正確な情報を見極める力が不可欠である。
- ③ オープンソース・ローカルファーストの選択肢を評価することである。Joplin のように、データ主権がユーザー自身にあるツールは、サービスの値上げや終了に左右されない長期的な安定性を提供する。

[参考]

- Evernote 公式サイト 料金プランページ <https://evernote.com/compare-plans>
- Notion 公式サイト <https://www.notion.com/ja>
- Joplin 公式サイト <https://joplinapp.org/>

補：本解説の参考資料等は <https://shikumi-gunzo.hatenablog.com/>、バックナンバーは <https://www.japa.fellowlink.jp/column>

4. 関連情報

新年度より、世の中の動きが激しく、月刊で紹介するには時機を逸する状況となってきたことを受け、従来の「関連情報」を Newsletter から分離させ、「旬報 時代のシグナル」として、よりタイムリーに「直近 10 日間の時代のシグナル」としてキュレーションし、配信（毎月 1 日、11 日、21 日発行）することに変更しています。

本旬報は、既往の分野・組織・枠組み・年齢・地域・概念を越えて、社会課題・地域課題に対して、個人として社会に何かを起こしたいと考えている人に、時代の構造的な変化を読み解き、自らが動き出すための手がかりを提示することを目的としています。

この構造的読み解きは、本 Newsletter の「1. コラム：時代を読む地図の作り方」の考え方を反映しながら、毎回、文献情報データ・編集のブラッシュアップを行っています。

文献情報は対象期間（直近 10 日間）内に公表・更新されたもので、発行主体・日付・URL が確認できるものに限定しています。

「旬報 時代のシグナル」の構成

【今旬の問い】

【時代環境】 with 関連文献情報

【時代構造】 with 関連文献情報

【日本創生・地方創生】 with 関連文献情報

【孤立・孤独・Well-being】 with 関連文献情報

【社会システム論】 with 関連文献情報

この「旬報 時代のシグナル」は Japa 会員（会費納入者）のみに限定配信しています。

購読をご希望の方は、これを機会に、Japa の会員（一般会員、会費 3,000 円/年）になって頂ければ幸いです。

購読（Japa 入会）に関するお問合せは、本 mail にその旨記載して返信ください。

5. 連携団体及び Japa からのご案内

▼連携団体の一般社団法人レジリエンス協会主催「2026 年 6 月定例会」のご案内

- ・ テーマ：防災力・減災力とレジリエンス機能「応災力」について
- ・ 開催日時：2026 年 6 月 29 日（月）13:00-16:00
- ・ 開催場所：日比谷図書文化館セミナールーム B / オンライン（Zoom）ハイブリッド
- ・ 参加費：無料
- ・ 詳細及び申込：<https://resilience-japan.org/>

▼ Japa と連携団体・青山 Hicon による「研究会」の参加者募集

Japa と青山 Hicon が共同して、4 月より、社会課題（社会的孤立・孤独・ひきこもり等）を解決するハイブリッドシステム（人間 with AI）の開発・普及をめざす「ひきこもり等支援システム開発普及研究会」をスタートし、第 1 回キックオフ会議を 2026/05/08 に開催しました。当該分野の専門家・実務家だけでなく、広く、社会課題解決に関心のある方やレベニューシェアで共創いただける IT/AI エンジニア（フリー、プロボノ等）方のご参加を歓迎いたします。ご関心のある方は、Japa 事務局までご連絡ください。

▼ Japa Newsletter 掲載写真の募集

Japa Newsletter の冒頭に掲載する写真を読者の皆さまから募集しています。掲載を希望する写真（著作権所有／フリー）がありましたら、画像 file をキャプション付きで事務局までお送りください。Japa Newsletter 編集仕様に則り掲載いたします。ただし、掲載希望多数等、事務局の判断で掲載できない場合がございます。

▼ Japa 日本専門家活動協会の会員募集

Japa は、会員（個人）と連携団体の方々の参加と協働により活動しています。Japa は、随時、会員〔正会員（年会費 1 万円）、一般会員（年会費 3 千円）〕を随時募集しています。会員になると、「旬報 時代のシグナル」（月 3 回発行）が講読できます。

▶入会案内の詳細 <https://www.japa.fellowlink.jp/admission>

6. 読者の声

■ 俳句随想 五七調の起源 ～リズム論事始～ その 3

（内閣府 地域活性化伝道師・（俳句）ARCセッション主宰 藤村望洋）

（7）現代俳句のリズム論（その 1・散文と韻文）

現代俳句において、「リズム論」はどのように位置付けられているのだろうか。著名な俳人・中村草田男による入門書としても著名な「俳句入門」（みすず書房 1959 年 9 月初版。以下 1979 年 8 月増補版を参照した）によって、リズム論の在り様を探ってみたい。なぜなら本書の跋文に曰く「俳句のリズムとは、どういう仕組みになっているか？（中略）こうした疑問は豊かな事例によって氷解し、諸君は新鮮な別世界に導かれてゆく」とあるからである。この草田男の「俳句入門」は、入門書として名高いのであるが、実は初心者が歯の立つしろものではない。むしろ阿部篤人著「俳句一四合目からの出発」（講談社学術文庫）に言う四合目レベルの俳人向きと言ってさしつかえなからう。かくなる筆者も最初に読んだ時は、数ページで放棄した。

この高度な草田男の「俳句入門」を参考に、適宜引用しながら、「詩（俳句）のリズム」を探っていきたい。

「文（文章）」は、散文と韻文の二つがある。散文は、論理、説明の世界であり、（草田男流に言えば）、「『智』の能力によって『真』を獲得すること」となる。「韻文は、語のリズム（音群の高低の波）を利用して調子をととのえて『美』の感情を読者の中に呼びおこし、同時に、語の音色（ねいろ）を利用して悲喜さまざまの作者の感情を読者につたえることを目的とする」ということになる。

同じ韻文ではあっても、欧米の詩と、日本の俳句の、それぞれの「リズム」の特徴について、簡単に言うと、西洋の詩は、韻（イン）を踏むことが出来るのに対して、日本語は韻を踏むことが容易ではないということがある。

欧米では、day, say, they のように子音（y）で韻を踏むことができる。しかし日本語は、子音と母音の組み合わせで1音が形成されているので（k a, s u, t e）、母音の5音のみが響くことになり、韻を踏むことが容易ではない。そこで、韻ではなく音数でリズムを作る。これが日本人の感性に五七のリズムとなって積み重ねられてきた。ちょっと長い草田男の文を引用する。

「欧米の国語においては、母音と別個に、子音が単独に自由に活動することができます。従って、数多い子音がいろいろに作用しますから、ある一語の中においてさえ相当に複雑なリズム（音の高低）を作り出すことができます。いわんや、そういう語どうしをいくつか、巧みに組み合わせますと、意のままに、さらに複雑な微妙なリズムの波をいろんな部分にかたちづくることができます。リズムの波による複雑な『美』を生み出すことができます」。これを草田男は「音韻律」としている。「ところが、日本語においては、決してそういうことが望めません。（中略）日本のトウジョウ（東条）、ヨシダ（吉田）などはリズムの上では至極単調です。それで、そういう日本の語を組み合わせたのでは、外国語による場合のような、各部分をこめての全体の複雑なリズムの変化美（『音韻律』）を達成することはできなもので、しかたなしに、自然と、特殊の方法がとられることになります。その方法というのは、語のやや長い塊（グループ）と、やや短い塊とを組み合わせ、それらを読み下し、あるいは発音しつつけてゆくうちに、全体としてゆっくりとした大きなリズムの波の高低が、どことなしに感じられるように仕組むことです（これを『音数律』といいます）。奈良時代にはすでに日本語の場合には、五音と七音との塊を組み合わせるのが、もっとも適当であることが経験によって日本人にハッキリとわかったのです。そして、最近まで日本の韻文は、ほとんど全種類のものがこの法則にしたがって作られてきたとみて間違いありません」。

引用が長くなったが、音韻律であれ、音数律であれ、散文と違って韻文（詩や俳句）にはリズムが必要ということはおわかりいただけたのではないだろうか。

（8）現代俳句のリズム論（その2・十七音形式）

引き続き中村草田男の「俳句入門」によって、音数律十七音形式の俳句を探ってみよう。

「韻文文学である俳句において、リズムはどのような仕組みによって生かされているかを、しらべてみましょう。これは、『俳句の形式』は如何——ということにも一致します。そして、

『俳句の形式』ならば、日本人(・・・)の(・)誰(・)で(・)も(・)が(・)熟知(・)して(・)いる(・)事柄(・)です(・)。

俳句は全体が十七音から成り立っている。そして、それが、調子の上で、五音・七音・五音の三つの部分に区切れている。『この区切れている』ことが大切です。どんな事柄でもを、ただ漫然と十七音全体で言い切れば全て俳句になるというものではなく、詩的内容を、この三部分に区切って表現していなければいけないのです。つまり、意味の上での区切れが、順を追って、五音・七音・五音となっていなければいけません。(中略)なにゆえに、この音節の組み合わせから、『美』が生じてくるのか——これは、やはりやや難解な問題に属しますが、日本の韻文に関する常識として、いちおう説明しておきましょう。(中略)日本の古い言葉に『詩歌』という言葉があります。『詩』は『漢詩』のことをさしていました。つまり『漢』から輸入された形式にならった『詩』(韻文)という意味です。それに対して『和』(日本)独特の『歌』(韻文)が和歌だったのです。『和歌』、すなわち日本独特の韻文は、非常に古い時代にはまだ形式が一定していませんでしたが、永く多勢の人々に取り扱われているうちに、日本語のリズムとして『美』を生むためには、どういう形式が適当であるかということが経験上で、おのずからハッキリと理解されたのでしょう。奈良時代には、もう大体「長歌」と「短歌」との二種の形式が基本になっていました。長歌とは——五音・七音の組み合わせをどこまでも内容を語り終るまでつづけて、最後に締めくくりとして、長いほうの七音をもう一つくっつけた形式です。そして、短歌とは——長歌の最後の部分を程よい分量に切り取って独立させた形式だという説があります」(太字と傍点は筆者)。

なぜ「唄」なのか、なぜ「韻文」なのか、なぜ「誰でもが熟知」しているのか(なぜDNA化しているのか)が、草田男には理解できていない。「経験上」でも「詩的な美」のためでもなく、文字のない時代の伝達・伝承のための「唄」(リズム)であることは、本論ではすでに明らかにしているところである。(続く)

■ 第二の人生 生涯現役で行く その13

(作詞・作曲家 高橋育郎)

「狐の嫁入り」にパリの平野さんが作曲

「狐の嫁入り」とは何か。静岡から西方は雲一つない晴天に振る雨の事。神奈川から東方は、狐が複数、田んぼのあぜ道など歩いているとき、体と体が擦れあって、静電気が発生し、パチパチと火花がみえて、これを提灯と見立て、提灯行列を嫁入り行列にたとえたのだ。

昭和21年、私が小学校(国民学校)6年生のとき、隣村に嫁いだ母の姉が病で入院したとき、家事手伝いに行った。そこは田んぼの中の一軒家で、遥か先にこんもり森がみえた。母は夕食のかたづけで井戸端に出たとき、ふと垣根越しに森の方を見ると、火花が幾つか見え、母は「これは狐の嫁入りだ」と思い、家に帰って、その情景を「狐の嫁入り」といって、私に話した。この記憶が残り50歳を超えた頃、作詞した。

平成26年7月、山本さんの紹介で、パリのコンセルバトワール音大卒の平野真由さんから電話が来て「高橋さんは、いろいろ作詞をされているそうですね。もし、よろしかったら幾つか送っていただけませんか」とのこと。そこで私は4作ほど送った。すると「狐の嫁入りが気に

入りましたので、作らせてください」とのこと。私は喜んでお願いした。こうして「狐の嫁入り」は出来上がった。すると平野さんは、この歌は薪能を思わせる幽玄の世界だからお琴や尺八が似合うと言ってきた。そこで私は高松さんに相談すると、早速、お琴の名手、日高さとみさんを紹介いただき、日高さんの琴伴奏で高橋知子さんに歌って頂き CD 録音した。すると今度は英訳が欲しいと言ってきた。そこでハーバード大学、日本文化博士のルイザ・ルビンフラインにお願いして翻訳して頂いた。

さて、この話には後日談がある。平成 28 年だったか。大晦日の夜、王子の伝統行事「狐の行列祭」をテレビでみた。

これは面白いと思い、王子の中央図書館を訪ねて、主任の方と話をしたら「いっそのこと『王子の狐の行列』の詞を作っては」と言われ作った。出来上がると、王子商店会会長を紹介してくれて訪ねた。会長は喜んで、行列祭の現地を案内してくれた。

この話を童謡プロジェクトで知り合った元公共機関の方に話した。

ところが何と自分の野心のために利用しようとたくらんだ。話はいいところまで進んで、あと一步のところで潰されてしまった。

潰された話は面白くないが、27 年 11 月に童謡 100 年プロジェクトの対談シリーズで、第一回として、私はたいらいさおさんと対談した。そして記事と写真が載った。そして第二回として稲村なおこさんと対談した。しかし、この対談は残念ながらオクラになった。

東日本大震災の被災者支援の歌

28 年 3 月のある日のこと。知らない人から電話があって、お願いしたいことがあるので東京駅八重洲の大丸の喫茶店にきてくださいとのこと。

行ってみると、5・6 人の人が待っていた。何事かと思っていたら「実は東日本大震災の復興支援の歌を作ってほしい」とのこと。石巻市の「絵本『ひまわりの丘』朗読会」をやっているのです、これのテーマソングを作ってほしいとのことだった。私はかねてから、支援の歌を作りたいと思っていたので、喜んで引き受けた。私を呼んだ方は「三月のひまわり」を主宰する星野さんだった。私はその絵本を頂いて帰り、即座に作詩作曲をした。スタッフの方が、涙が出たとおっしゃった。星野さんは、地元に行って、この詞をみせると「ひまわりの咲く丘」としてほしいと言われたとのこと。そこで、題をそのようにした。

28 年 3 月に福岡県大野城市の少年少女合唱団が歌った。続いて柏市の県民ホールで地元の児童合唱団とママさんコーラスより歌われ、それから 4 月に「絵本『トミジの海』朗読会が神田神保町で行われ、元 NHK アナウンサーが朗読した。その後、銀座で行われたとき、キムタクこと木村拓也の母親が朗読をした。絵本の朗読会は都内のあちこちで頻繁に行うようになり、私は呼ばれたが、キムタク人気で会場はいつも入りきれないほどの満員になった。私は震災発生から 3 年ほど後に頼まれたのだが、発生 10 年後に、このイベントは終わりとなった。

習志野市のユルキャラに音頭を

先ずは 25 年のこと。習志野市「生涯青春の会」の会員になった市会議員の杉山さんから市内の喫茶店に呼び出しを受けた。来年は市制 60 周年になるので「習志野市の歌」を作ってほしいとのこと。私は耳を疑うほどの驚きだった。実は市の歌はあるにはあるが古くなって今の時代にそぐわない。そこで新しくしたいとのことで、署名を千人くらい集めてほしいと、かなりの難題だったが、何とか頑張りましたよと、奔走した結果、ほぼ集まった。

その署名を持って杉山さんと市役所の係へ持って行くと、係員は何も言わず、金庫にしまってしまった。議会に掛けるということで、私は傍聴席に呼ばれたが、なんなく通過した。しかし、2 回目に私がいなくて否決された。そして、広く一般募集に切り替えた。歌詞は二番ということだ。そして、一位がきまって発表会があって、私は呼ばれた。入り口のところに市長がおられ、挨拶された。

26 年。杉山さんは、ユルキャラ「ナラシド♪」を考案し、私にテーマ曲を依頼。私は、それを受けて「ナラシド♪どンドン音頭」を作詩作曲した。歌手が決り CD の吹き込みになった。杉山さんと私、それからマネージャーの三人が「それ」のかけ声を入れた。そして振り付けが付いて「生涯青春の会」で発表会を市長臨席のもとで行った。さらに、杉山さんの地元で子どもたちが太鼓を叩き町中で歌った。私も呼ばれて行った。編曲は千葉テレビの音楽担当が行った。後に杉山さんが公民館で歌の会を主宰し、私が歌唱指導を行い、この音頭も歌った。ピアノは、地元の童謡協会会員の高橋知子さんが担当した。しかし、間もなくコロナ禍のため会は終わった。 (続く)

7. つぶやき（編集後記に代えて）

いよいよ、お米の値下がりが始まった。近くのスーパーでは、某ブランド米の令和 7 年産の 1 ヶ月前に精米したお米 (5kg) が半値の ¥2,390 円で売られていた。有名な販売会社の精米である。今年の新米の流通を前に、在庫調整が始まったようである。今時、生産調整・流通調整しようとする政策自体が時代遅れで、そのいびつさが問われて久しいが、いっこうに変わらない。おかげで、消費者の米離れ、耕作放棄地の拡大等が進んでいる。地域によっては、米づくりをする担い手がない。里山が放棄され、田畑が放棄され、空き屋が放棄され、日本の原風景が失われつつある。いまや、農村計画（中山間地・調整区域）、まちづくり計画、さらには流域治水計画等を個別に語れる時代ではない。地域空間を維持し活用する担い手がない。地域活性化以前の問題である。まち中へのイノシシ・鹿・クマの出没はその警告かもしれない。

編集発行人：Japa 日本専門家活動協会 代表理事 芝原靖典

発行元：Japa 日本専門家活動協会 <http://www.japa.fellowlink.jp/>

問合せ・連絡先：info@japa.fellowlink.co.jp